明治初期の英語導入に伴う日本語概念表記の変容に関する研究[1)]

佐藤　正幸

Conceptual Changes in Japanese Terms after the Introduction of English during the Early Meiji Period

SATO Masayuki

Abstract

During the Edo period (1600-1868) the Atlantic Ocean was known as the “Great Western Ocean” (Taiseiyō 大西洋); the Pacific Ocean was called the “Great Eastern Ocean” (Daitōyō 大東洋). After 1870 the term for the latter sea was changed to “Great Calm Ocean” (Taiheiyō 太平洋) so that the meaning of the word would align with the meaning “pacific.” The Atlantic Ocean underwent no renaming, though the Chinese characters reading “Atara-kai 阿多羅海 ” were proposed. This study uses differences in the use of Chinese characters related to nautical terminology as a clue for explaining changes in Japanese terms and concepts accompanying the introduction of the English language into Japan.

Ⅰ

ユーラシア大陸の西端と東端に数千年にわたってふたつの長い歴史を持つ文化圏が存在し続けている。日本では、このふたつの文化圏を東洋と西洋という言葉で表現してきた。

しかし、考えれば考える程、実に奇妙な表現ではないかと思う。東洋文化とか西洋文化というけれども、なぜ海域をしめす表現を、陸地で展開している社会文化に使用するのか。東洋人とか西洋人、東洋社会とか西洋社会と言うが、なぜ海域をしめす表現を陸地に存在する人間社会に使うのだろうか。

17 世紀の中国においては東洋列国・西洋列国という表現が存在したが、[2)] 日本では直近 100 年以上にわたって、東洋と西洋という漢字 2 文字が成語として使われている。注意してほしいのは、漢字の本場中国では、東洋と西洋は文字通り海域を指し示すだけの表現にすぎず、現代日本語と同じ意味で使われることはない。

Ⅱ

International Commission for the History and Theory of Historiography の 2007 年度研究大会が上海の華東師範大学で開催されたときのことである。世界各地で開催される人文社会系の国際会議では、世界共通語である英語が不得意な現地研究者のために、通訳付きのサブセッションがしばしば併設される。中国で開催される国際会議では、中国人歴史家が中国語で発表しそれを通訳が英語に翻訳する分科会が設定される。国際会議であるから必ず歴史学の東西比較研究がテーマの一つとなるが、中国では東洋とか西洋という表現の代わりに、東方とか西方と表現する。考えてみると、この表現の方が確かに適切な表現だといえる。

ところが、実際の会議では例えば「東方と西方における歴史学の比較研究」という表現が使われると思いきや、「中西比較」つまり中国と西方における歴史学の比較研究という表現がもっぱら使用される。東方と西方という表現の方が適切だと思われるかもしれないけれど、これは日本人の視

山梨県立大学　国際政策学部　総合政策学科
Department of Glocal Policy Administration, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

点からする見解に過ぎず、自国である中国とヨーロッパを比較するという表現が使われている。

Ⅲ

中西比較という表現に最初の頃は何か釈然としないものを感じたが、慣れてしまったせいか、最近ではあまり気にならなくなった。ちょうど我々が日欧比較という表現を奇異に感じないのと同じである。東アジアと西ヨーロッパの歴史叙述の比較というのならまだしも、日本とヨーロッパ全体を比較するという表現は、第三者の視点からするとバランスのとれたものではない。

これは、人間の世界認識は自己中心的であるというテーゼを補強するひとつの証拠でもある。中西比較という表現も、日欧比較という表現も、それぞれに自国を会場にして、自国民を聴衆として自国語で研究発表を行っているからこそ意味をなす表現なのであって、この研究発表を研究者自身が現在学問の世界共通語である英語で行ったとしたら、たとえ聴衆が自国民であったとしても全く異なったコンセプトで発表原稿を作成しないと意味をなさなくなる。歴史学の中西比較ではなく、問題点を絞ったテーマとし、例えば「近代西洋史学がつくりあげたヒストリカル・オブジェクティビティー（歴史的客観性）という概念を、中国史学の伝統的表現である直筆・曲筆という概念表記に置き換える時、そこにどのような意味変容が起こるか、また、その変容を惹起させる歴史認識論的背景とはいかなるものか」と言った具合である。

私がいつも思い起こすのは、ユーラシア大陸の西と東に、ほぼ同じくらいの面積を持つ文化圏が数千年にわたって存在し続けてきたこと、世界地図を開いてユーラシア大陸を二つ折りにすると、ブリテン諸島と日本列島が対をなし、中国とEUが対をなすという奇妙なまでの対称の妙、そして、その二つの文化圏が文化的対話をはじめた21世紀に生まれ合わせたこととの符合である。

Ⅳ

中国という表現をすると、現在の我々はひとつの国としてとらえてしまうが、歴史的に中国は多民族・多文化・多言語国家であり、過去3000年にわたって統一と分裂を数百年おきに繰り返してきた地域であったことを思い出してもらえば、EUとの対称の妙という私の見方も受け入れてもらえると思う。

このふたつの文化圏は、漢字文化圏とローマ字文化圏という表現を使用すると、より以上に比較の視点が定まると考えている。この文字をもとにした文化圏比較に確信が持てたのは、2005年にオーストラリアのシドニーで開催された国際歴史学会議の時である。[3] 私はこの会議の席で、非ヨーロッパ人である私の目からするとEUが成立できたのはすべてのメンバー国がラテンアルファベットを使っているからではないかと述べた。つまり、EU諸国で使用される言葉の語幹においてはその八割以上が共通であり、私の目からすればそれぞれが方言のような存在であるので、相互の意思疎通に関する共通基盤が存在するからではないかという趣旨の発言を行った。

この見解にいち早く反応したのは、ベルリン大学教授のユルゲン・コッカであった。コッカは次のようにコメントした。「自分はEUの根底に共通文字があるということを今まで考えたことがなかった。しかし、指摘されてみるとその通りだ。ドイツは1950年代まで髭文字（フラクトゥール）を使っており、私は髭文字が読める最後の世代なので、佐藤のいうことは実に納得がゆく説明である。」

ドイツは第二次世界大戦中から10年かけて、表記文字を髭文字からローマ字に移行している。だから、この共通文字という視点は、彼にとっては体験的に納得のゆくものであったといえる。

これは、東アジアではEUに相当する共同体がなぜ生まれないのかという質問に対する私の返答である。この返答の原点にあるのは、東アジアでは漢字という共通文字が既に失われてしまっており、また、東アジア・東南アジアには共通の文字が存在せず、今現在共通の表記文字を決定するとしたら、古代ローマ人の考案したローマ字を採用するしかないという私の現実認識がその背景にある。

2012年6月にソウルのアサン政策研究所で開催された「東アジアとは何か」に関する国際会議の講演でも、私は東アジアの共通財産は漢字にあることを述べ、講演を英語で行わなければ会場にいる世界各国からの参加者に理解してもらえないことの無念さを強調した。[4)]

Ⅴ

EUのメンバー国すべてがラテンアルファベットを使っているわけではない、ギリシャはギリシャ文字を使っているではないかと反論する読者がいるに違いない。私の年来の友人であるアテネ大学のアントニス・リアコス教授によると、ギリシャ人は皆ラテンアルファベットを読むことが出来るので何の問題もないとして、次のように説明してくれた。現在のギリシャ人はアリストテレスやプラトンに代表される古代ギリシャ人の末裔ではなく、近代以降中東方面からギリシャの地に移住してきた人々であり、ギリシャ人としてのアイデンティティーを得るためにギリシャ文字を使用しているにすぎないと言う。日本列島に2000年以上にわたって住み続けている我々日本人にはなかなか理解し難い国際感覚である。日本に住んでいると、国家イコール文化であり社会であり言語であると言う考え方が生活を通して身に付いてしまうので、現代ギリシャ人のような考え方は我々日本人の理解の範囲を超えているのかもしれない。

確かに歴史的に考えてみれば、実はローマ字自体が、古代ギリシャ文字をお手本にして古代ローマ人がつくったものであるのだし、事実古代ギリシャ語からの語彙はローマ字で書かれた古代・中世・近世のラテン語による文書や現代のヨーロッパ諸語の文書の至る所に入り込んでいる。例えば歴史に相当する語彙は、英語ではヒストリーhistoryであるが、これはラテン語のヒストリアhistoriaに由来する言葉であり、このラテン語は、実は古代ギリシャ語のイストリアἱστορίαに由来しており、事物を探求するという意味である。

ところで「ローマ字」という呼称は日本だけのもので、英語ではこれを「ラテンアルファベット」と表現する。ギリシャ文字は英語で「グリークアルファベット」である。このアルファベットという表現自体がギリシャ文字の最初の文字であるアルファー（α）とベータ（β）からつくられた表現であると説明すると、EUにおけるギリシャの立場が納得できるのではないだろうか。

もうひとつリアコス教授との話で興味深かったのは、今のギリシャ人はギリシャ文字を使いギリシャ語を話しているからといって、アリストテレスやプラトンが読めるわけではない。それ相応の訓練をしないと全く理解できない、という話であった。

これを聞いて私が思い起こしたのは、中国古典である。現在の中国人が漢字を使って中国語を使用しているからといって、四書五経が読めるわけではない。それ相応の訓練をしないと読めないのである。日常的に漢字を使用している日本人ならば『老子道徳経』や『論語』が理解できるはずだといわれても、注釈無しには内容が把握できないのと同じである。古典というものは不思議なもので古典の側から話しかけてくる存在なのではなく、こちらがその意味を理解しようと努力して初めて、その英知の堅い扉を開いてくれるものである。

さて本題に戻ろう。ここでは、我々がふだん頻繁に使っている西洋と東洋という日本固有の表現がどのようにして誕生し、意味内容の変化がどのように起こったのかについて、少し掘り下げて考察してみたい。ここでも我々は海洋表現を文化概念として使うようになった数百年にわたる歴史的経緯を知ることになる。

西洋と東洋の問題に入る前に、これと類似の表現を検討することから、はじめたい。

Ⅵ

梅棹忠夫は、彼の代表作である『文明の生態史観』（1957年）の中で、西洋と東洋だけではなく、べつに中洋という表現を使うことを提案したが、[5)] 50年後の今日でもあまり使われていない。アラブ世界を中洋と呼ぶことが彼の提案の趣旨であり、独自の文化と歴史をもつこの地域のとらえ方として

は実に説得力に富むのだが、なかなか広まらない。

なぜ広まらないのであろうか。人間の思考法は、基本的に二分法を好むからであり、そして、いくつかの二分法を組み合わせることで、世界を把握しようとする傾向があるからである。また、ヨーロッパ・アラブ・東アジアという実体的概念表記ではなく、西洋・中洋・東洋という相対的概念表記を使う場合は特にその傾向が著しく、二分法の組み合わせという思考法から我々は逃れることが出来ないようである。

西洋人の二分法には、イースト（東）とウエスト（西）、オリエントとオクシデントがある。私の観察では、これらの使い分けは次のようになる。イーストとウエストは、現在では一番広範囲で使われている二分法であるが、使う人によって様々である。例えば、イギリスの詩人であるラドヤード・キップリング（1865―1936）が「東は東・西は西」と 1889 年に詩にうたった時、彼の頭にあるイーストはインドであった。[6] 同じイギリス人の科学史家ジョセフ・ニーダム（1900-1995）が「東と西の科学」という時、彼の頭にあるイーストは中国であった。人それぞれの仕事や関心事によってイーストはみな異なるのである。[7]

イーストとウエストという方向を指示する言葉の語源を遡ってゆくと、オリエントとオクシデントと同じ語源にたどり着く。それはラテン語であり、もとはギリシャ語からきている。そこでは、イーストもオリエントも、太陽の昇る方向、日の出の方角という意味である。それに対してウエスト及びオクシデントは、太陽の沈む方向、日の入りの方角という意味である。そして、英語のイーストやドイツ語のオストなどはギリシア神話に出てくるエオス（暁の女神）に由来する言葉である。

オリエントとオクシデントもよく使われる表現であるが、日本では歴史の専門家以外に広まることがなかった。しかし欧米においては、今でも広く使われている。オックスフォード大学では、現在でも中近東を含む全アジア地域の研究をオリエント研究と称し、学部名称となっている。[8] もちろん日本もオリエントの一部である。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院と訳されている機関は、スクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズであり、日常的にはその頭文字をとって SOAS（ソアス）と略称で呼ばれているが、ここでもイーストではなくオリエントが使用されている。[9]

イーストもウエストも、またオリエントもオクシデントも、地理的に特定の地域を示す概念ではなく、ある文化が自分の位置しているところを中心にして外の世界を観察する時につける名称である。私はこれを思考概念とよびたいと思う。

ヨーロッパ人がつくり上げたイースト・オリエントとウエスト・オクシデントに相当するのが、日本では、西洋と東洋という思考概念である。西洋も東洋も日本人がつくり上げた思考概念であって、オリエントやオクシデントとは、本来的に全く関係ない独立した思考概念である。東方と西方は、中国人がつくり上げた思考概念である。それぞれの地に自分を置いてみて、初めてその呼称が意味をなす、相対概念だからである。

Ⅶ

問題がややこしくなる原因のひとつは、この相対概念を使用する人々が、これを実体概念としても使うようになる時である。地理的に特定することの出来る表現、例えば、ドイツとかフランスという実体概念をより一般化・抽象化したものとして西洋という表現を使うような場合である。この使用法が非常に限られたグループ内でしか共有されていない概念であることに気づくのは、それを使う人が、そのグループから離れた場で、その用語を使用した時である。例えば、日本人がポーランドで、「モスクワは西洋の一部であり、ヨーロッパの一部である」と言ったとすると、嘲笑の的となり、誰も話を聞いてくれなくなる。

ヨーロッパ特にイギリス・フランス・ドイツに住む人々は、ロシアは言うに及ばずスラブ圏の国々ですらヨーロッパの一部と考えてはいない。同時に、ロシアやスラブ諸国に住む人々は、自分たちの国をヨーロッパの一部とは考えていないのである。モスクワをヨーロッパの一部と考えるのは、日本人くらいである。

エドワード・サイードは『オリエンタリズム』という著書を出版し、オリエントという言葉が歴史的にノン・ヨーロッパという負の概念をおわされてきたことを書いた。[10] しかし注意しなければならないのは、彼がオリエントという時、彼の頭の中では、オリエントは彼自身が生まれ育った中近東のイスラム世界であり、中国や日本は入っていない。

しかし香港で1954年に創刊され現在でも刊行され続けている雑誌『ジャーナル・オブ・オリエンタル・スタディーズ』は東アジアと東南アジアに関する研究を専ら扱っており、ここで使用されているオリエントはユーラシア大陸の東端地域を指していることが分かる。[11] イーストやウエストは一見事実的で客観的表現のように見えるが、これも使われる国や、何に焦点を当てた議論かによって一律ではない。イギリスでは、イーストとかアジアというと、一般的にインドを思い浮かべる。つまり、西洋人にとっては、イースト・オリエント・アジアはヨーロッパというコンセプトの補完概念として存在し続けてきたのである。補完概念とは、「ヨーロッパ以外のもの」に対して命名した概念と定義できる。だから、その内容は本来的に千差万別なのである。

Ⅷ

イーストと東洋が指し示す地域はまるでちがうものだし、ウエストと西洋が指し示す対象地域には大きなズレがある。なぜズレがあるのかというと、東洋も西洋もこの世界の実体を指示した言葉ではなく、日本人がつくり上げた日本人の思考概念を表現する用語だからである。

両者の間の関係がややこしくなってきたのは、明治時代に入って西洋文化が日本に入ってきてからである。日本は、西洋で使用されていた語彙のほぼ100％を漢字二語或いは三語からなる言葉に置き換えることで、母国語である日本語をベースにして西洋文化を受け入れるという、世界でもユニークな欧米文化の受容方法を採用した。明治日本はイーストを「イースト」として受け入れたのではなく、このイーストと概念的に似ていて、かつそれまで使用されてきた言葉があると、それを利用することで漢字二語の用語に置き換えた。イーストの場合は、これを東洋という漢字二字の組み合わせに置き換えて受容するという文化受容の方法を採用した。これ以降、「概念の変容」と「概念の逆転」が起こるのである。

概念の変容とは、東洋＝イースト、西洋＝ウエストという概念が定着することで、東洋と西洋という漢字の組み合わせが歴史的に担ってきた概念の上に、イースト・ウエストという西洋文化がつくりあげた概念が入り込む。次にこのふたつの概念の間で様々な齟齬が生ずる。そして明治後半になると、「概念の逆転」が起こり、東洋は英語のイーストの訳語として、西洋は英語のウエストの訳語として第一義的に理解され始めるのである。

この概念の変容と概念の逆転は、現在我々が何気なく使用している多くの言葉で生起してきた現象であり、21世紀に生きる我々は、生まれた時から「概念の逆転」が起きて以降の日本語を使用しているのである。以下ではこの問題を東洋と西洋という言葉に焦点をあてて考察してみたい。

Ⅸ

今現在使用されている東洋と西洋という言葉を考えてみよう。東洋・西洋という用語は、常に対概念として使われてきた。どちらも、突き詰めて考えて行くと曖昧な表現である。西洋の範疇に入る国はどこか、東洋の範疇に入る国はどこかという質問を私は毎年大学の授業で学生に問いかける。しかし学生によって答えは千差万別である。西洋の範疇に入る国として、EUのメンバー国と答えたり、ロシア、アメリカ、カナダを入れたり、オーストラリアを入れる学生もいる。東洋の範疇に入る国として東アジア諸国や東南アジア諸国と答える者がいたり、アラブ諸国やアフリカが入ると答える学生もいる。

私自身は明確な規定は不可能だと考えている。むしろ、このような私の質問自体が意味をなさないのである。なぜならこれは地理概念ではなく、文化概念であり、歴史概念であり、なによりも「日本人の、日本人による、日本人のための思考概念」

だからである。

いったいこの東洋・西洋という用語はどのような経緯で誕生してきたのであろうか。そしてどのような経緯で、現在のようなユーラシア大陸の東と西の陸地で栄えた文化圏を東洋･西洋という「海洋名称」で表現するに至ったのであろうか。

X

坪井九馬三や高桑駒吉の研究によると、東洋・西洋という表現は元来、中国人の考えた四海のひとつである南海を西南・東南に分けたもので、泉州或いは広州を起点としてこの点を通過する南北子午線によって航路および航路に存在する諸国を分けたものであるとしている。[12] 宮崎市定は、既に宋代には東南海・西南海という呼称が使われていたことを史料で裏付けている。[13]

山本達郎は、東洋という言葉が初めて使われたのは、汪大淵『島夷誌略』(1349 年）であり、この書物の中で東洋・西洋という表現が使われていることを突き止めた。[14]

張燮は『東西洋考』(1616 年) の中で、「文莱即婆羅國、東洋盡處、西洋所自起也」（巻 5 文莱)、つまり､婆羅國と呼ばれる現在のブルネイ（文莱）は、東洋がそこで終わり、西洋が始まるところであると述べている。[15] ブルネイを境にしてその西を西洋、その東を東洋と規定しているのである。また､第 5 巻及び第 6 巻には「西洋列国考」と「東洋列国考」と題する章があり様々な国々を列挙している。これらの表現は、西の海の彼方にある諸国、東の海の彼方にある諸国の意であり、また東洋針路・西洋針路という項目があるので、東洋・西洋はあくまで海域に関する表現として使われていたと言える。[16]

XI

この東洋・西洋という用語が航路だけでなく、海域そのものを示す用語へと変化してゆくのは、明末中国でキリスト教布教活動を行ったイタリア人のイエズス会士マテオ・リッチの『坤輿万国全図』(1602 年）と題する世界地図が刊行されてからである。なぜならこの地図の歴史的意義のひとつは、世界の地理名称をすべて漢語に翻訳したところにあるからである。また、世界地図の中心に中国を位置させた嚆矢であり、現在の日本で使われている日本中心世界地図のモデルになった地図でもある。この世界地図は 17 世紀はじめには日本にも舶載されて伝来し、日本人の世界像の元型として、現在まで使われ続けている。東北大学付属図書館の狩野文庫が所蔵する『坤輿万国全図』に記された海域表記を見てみよう。

まず東洋であるが、日本の東北沖に小東洋、カムチャッカ半島の南沖に小東洋という記述がある。大東洋という記述は、カリフォルニア沖に 1 つある。

西洋という表記は、インドの西海岸に小西洋という記述があり、ポルトガルの西海上に大西洋という記述がある。

一方中国の伝統的な呼称である北海・南海・東南海・西南海も表記されている。北海はベーリング海上に位置し、南海はアラフラ海上に位置し、東南海はペルーの西海上に位置し、西南海はマダガスカル島の東海上に位置している。

尚、東南海の南方海上である南アメリカ大陸の南端海上に「寧海」という表記がある。

現在刊行されている世界地図は、太平洋という一語でこの 1 億 6 千平方キロメートルの面積を持ち地球の表面の約 3 分の 1 を占めるこの広大な海域を指し示している。しかしマテオ・リッチの世界地図には、現在我々が太平洋と呼んでいる海域全体を一つの名称で表記するという考えはなく、北海・南海・東南海・西南海・大東洋・小東洋・寧海という 7 つの海域名称を与えている。

XII

このマテオ・リッチの『坤輿万国全図』を参考にして、日本では多くの世界地図が作成された。それらの世界地図に共通するのは、この海域を示す東洋・西洋が抜け落ちていることである。海域そのものに名前を付けるというものの考え方は、どうも西洋人特有のもののようで、日本人には馴染みのない習慣に見受けられる。

海に名前を付けるという意識は、日本では 17

世紀も終わり近くになってから始まったようである。渋川春海の『世界図』（1698 年頃）には、北太平洋に小東洋が記され、アメリカ大陸の東の海上に大東洋が記されている。一方インド洋は小西洋と記され、ポルトガル沖には大西洋が記されている。

渋川春海以後、この東洋・西洋の海域呼称が多くの世界地図で使われ始める。大東洋が現在の太平洋海域を指すようになるのは、長久保赤水『地球万国山海輿地全図説』（1788 年頃）からである。

しかし現在の太平洋を大東洋というひとつの名称で名づけるという考えはまだ生まれていないようで、カリフォルニア沖に大東洋と記され、赤道以南は想像上の大陸メガラニカ（墨瓦蝋泥加）の沖に南海・西南海という表記がなされている。1708 年に作られた稲垣光朗『世界万国地球図』には小東洋だけが現在のインド洋に記されている。1725 年頃に作られた『本朝天文図解』所載の「地球之図」には、小西洋と大西洋が記されている。

司馬江漢『地球図』（1792 年）では、小西洋はインデヤ海となり、小東洋という表記は地図上から消え、大東洋と大西洋という表記がなされている。この世界地図はマテオ・リッチの伝統を継ぐ世界地図と云うより、江戸時代にオランダからもたらされた蘭学系統の世界地図がもとになっている。桂川甫周は『北槎聞略付録地球全図』（1794 年）の中で、大東洋に代わって太平海という表記を使用している。これは、ロシア使節ラックスマンがもたらしたロシアの地図を参考にして作られたものである。しかし、桂川甫周の『北槎聞略』の別の付図『亜細亜全図』には小西洋が記されている。また一方、高橋景保『新訂万国全図』（1810 年）では、現在の太平洋をひとつの海とする考えは生まれておらず、北太平海・南太平海と大東洋の 3 つを書き込んでおり、小東洋・小西洋は消えている。

XIII

東洋・西洋という点から興味を引く現象は、パシフィック・オーシャン（Pacific ocean）とアトランチック・オーシャン（Atlantic ocean）という英語の表現が幕末に日本に入ってきて以降、日本および東アジアにおける海洋表記がどのように変化したかである。

世界一周航海を最初に成し遂げたポルトガル人航海家マゼランはスペイン国王の援助で艦隊を組み、1519 年スペインを出帆、マゼラン海峡を通過して太平洋に出、1521 年に太平洋を横断してマリアナ諸島に到着した。この航海の間、海が静かだったのでこの海をマレ・パシフィクム（Mare Pacificum）すなはち「平和な海」と名づけた。この呼称はその後広くヨーロッパ世界で使われるようになり、幕末の日本にこの呼称がもたらされると、それまで使われていた大東洋に代わって、パシフィック・オーシャンの日本語訳である「太平洋」という表記が使われるようになった。これと時を同じくして、マテオ・リッチの世界地図で南アメリカ大陸の西南海上近辺を名づけた「寧海」は、まさにマゼランの命名したマレ・パシフィクムの漢訳であったが、この表記は地図上から消滅した。

この呼称と同時に、アトランチック・オーシャンという表記ももたらされた。アトランチック・オーシャンはプラトンが『ティマイオス』と『クリティアス』で言及している伝説の大陸アトランティスの名にちなんでつけられたものである。ところが、このアトランチック・オーシャンは、日本語に訳した呼称が使われず、大西洋という旧来の表記が今でも使われている。永井則の『銅版万国方図』（1846 年）や箕作阮甫の『新模欧邏巴図』（1851 年）ではアトランチックに漢字をあてはめた「亜太臘海」という表記が見られるものの、この呼称は根付かなかったようである。

この時期は様々な表記が試みられていた時期で、中島彭『新訂地球万国方図』（1852 年）では大西洋という表記と共に、太平洋には大東洋・北太平海・南太平海の三表記が併記されている。

現在の太平洋と大西洋をひとつの海とする表記を取り入れた初期の地図のひとつは、山路諧孝『重訂万国全図』（1855 年）であるが、表記そのものは太平海と壓瀾的海（アトランチックの漢字によ

る音表記）が採用されている。武田簡吾『輿地航海図』（1858 年）では、大西洋と北太平海・南太平海という表記が行われている。当時の一般通念は海より洋の方が大きな海域の表記に使われていたことが、これらの海域表記の変遷から推測できる。

XIV

太平海に替わって太平洋が使われ始めたのはいつであろうか。遠藤泰生の研究によると、英国人宣教師ウイリアム・マリヘッド（中国名慕維廉）が著した『地理全志』（上海、1853-54 年）の中で使用された太平洋が、岩瀬忠震の手により 1858 年に日本で翻刻紹介されたのが初めてのようである。[17] また 1860 年に出版された大鳥圭介訳『万国総覧』では太平洋という単独表記が使われている。この混乱は明治に入ってからもしばらく続く。福沢諭吉は 1869 年に出版した『世界国尽』のなかで、アトランチック・オーシャンを阿多羅海、パシフィック・オーシャンを太平海と訳している。インド洋は小西洋でなくインド海となっている。

しかし、翌明治 3 年に内田正雄編纂により大学南校から出版された『輿地誌略』では太平洋と大西洋が使われ、これ以降この呼称が定着することとなったようである。これ以後、地理用語としては現在に至るまで、このバランスを欠いた表記が使われ続けている。つまり、大東洋と大西洋という相対表現的組み合わせではなく、太平洋と阿多羅海というヨーロッパ起源の海洋表記の組み合わせでもなく、太平洋というヨーロッパ起源の海洋表現と大西洋という東アジア起源の海洋表現の組み合わせが現在でも続いているのである。学校で使用されている最近の社会科地図帳を見ても、大平洋（パシフィック・オーシャン）と大西洋（アトランチック・オーシャン）となっており、このズレは、ずれのまま現代でも使用されている。興味ある事実は、中国の最新世界地図でも、日本と同じ太平洋と大西洋の組み合わせが使われていることである。韓国でも同じく대서양（大西洋）と태평양（太平洋）が使用されている。

世界的にはアトランチック・オーシャンという表記が使われているにもかかわらず、東アジアでは依然として大西洋という昔からの表記が使い続けられているのである。

XV

意味内容からしてパシフィック・オーシャンと太平洋は結びつくが、アトランチック・オーシャンと大西洋はまったく結びつかない。このような世界標準の表記と、日本語による表記の齟齬は、日本文化の至る所で起こっている。日本に住み日本語で生活している限りにおいては、何の問題もないのだが、一歩日本を出ると、様々なトラブルに遭遇する。

現在世界共通語の英語とのズレは時々深刻な問題を提起することがある。いくつか例をあげてみよう。日本語と英語との表現のズレで有名なのは、歴史を例にとると「南北戦争」という表記である。これは、英語では American Civil War (米国内では The Civil War) と表記する。この種のズレの克服には、高等学校の世界史教科書にある南北戦争という用語の上に英語で American Civil War というルビを振れば、ずいぶん改善するであろう。

これとは逆に、明治維新という歴史用語を、英語で Meiji Restoration と表現することも実に不思議である。維新と言うのは、『詩経』に出てくる「周雖旧邦 其命維新」（周は旧邦なりといえども、その命はこれ新たなり）からとったものである。しかし、「これ新たなり」という意味内容と、Restoration の意味である「旧制度に復す」「王政復古」という意味内容とは 180 度違う表現である。日本国内では維新という新たな時代の到来を告げる表記を使い、日本の外ではレストレーションという政治的に旧に復した日本という表現が 150 年間使い続けられているのである。

XVI

東洋・西洋は海域を示す言葉として登場したが、大東洋・小東洋という呼称は幕末以降太平洋に取って代わり、世界地図の上から消滅した。小西洋はインド洋と呼称が替わったが、大西洋だけ

が現在に至るまで使われ続けている。

しかしこの東洋・西洋という対概念は、明治以降、海域と云うより陸域を示す言葉として転用されるようになってきた。それもただ単に地理的な意味での陸域呼称ではなく、政治・経済・歴史・科学技術・文化・社会といった人間の活動全体を総称した呼称として使われるようになった。文化概念としての西洋と東洋の誕生である。

明治にはいると、東洋は、英語のオリエント或いはイーストの訳語として使われるようになった。同様に西洋は英語のウエストの訳語として使われるようになった。しかし注意しなければならないのは、先に述べたように、アジアやヨーロッパは地理的な実体を指し示す用語であるが、東洋は西洋という用語とセットになった相対的な概念表記であることである。

XVII

あまり知られていないことだが、海域呼称を除くと明治以前に「東洋」という用語はほとんど使われてこなかったことである。寧ろ「西洋」という表現の方が文化概念として早くから使われていたということが出来る。

1715 年の日付をもつ新井白石の『西洋紀聞』が初めて公刊されたのは 1882 年であるけれども、この表題は、西洋という言葉を実体概念としてはじめて使ったもと考えられる。[18)]

白石以後、西洋という表記は江戸時代を通して使われてきたようで、『国書総目録』には、書名に「西洋」と冠した明治以前の出版物として 230 点の書籍が挙げられている。西洋歴史関係の著書に焦点を絞って概観してみると、本田利明は「西域」という表現でヨーロッパの地理や文化を紹介しているが（『西域物語』1798 年）、その 3 年後の 1801 年に山村才助は『西洋雑記』と題してヨーロッパの歴史と世界各地の話を纏めた著述を行っている。1808 年には佐藤信淵の『西洋列国史略』が出版されて、ヨーロッパの歴史を叙述しており、これ以降西洋という用語を使ったヨーロッパについての著作は幕末にかけて数多く出版されてきた。

その後明治にはいると、福沢諭吉の『西洋事情』に代表されるように西洋という用語は時代の寵児となったが、これ以外にも、泰西史、極西史、萬国史、欧羅巴史、欧州史といった様々な用語が生み出された。しかし、これらの用語の中で現在まで使い続けられているのは、西洋という用語ただ一つである。

それに対して、明治以前の出版物で、「東洋」という用語を含んだ図書は『国書総目録』に掲載されていない。明治以前に使用された東洋という表記で唯一私が覚えているのは、日本で最初に医学解剖を行った山脇東洋（1705-62）という人名のみである。川路聖謨（1801-1868）には『東洋金鶏』という表題を持つ著作があるが、これは後世の命名であって、彼自身が使用したものではない。

興味あることに、太田為三郎が編纂した『日本随筆索引』（岩波書店、1925 年）及び『続日本随筆索引』（岩波書店、1932 年））を見ると、西洋と題する見出し語は掲載されているが、東洋は見出し語として掲載されていない。東洋という用語は、もし存在していたとしても使用頻度の極めて低い用語であったことが推測される。

東洋より先に西洋がひとつの概念として使われていたことは、この問題を考える上で重要である。実体概念としての「西洋」がうまれ、その補完概念として「東洋」が生まれたといっても差し支えないであろう。日本の近代化＝西欧化の副産物として、実体概念としての「東洋」が生まれたということが出来るかもしれない。

XVIII

東洋という用語が明治以降使用されたのは、オリエント、或いはイーストの訳語として使われ始めたからだと考えられる。これまで見てきたように、明治以前は実体概念を持つ用語として使用されることのほとんどなかった東洋は、ヨーロッパ人の創り上げたイースト・オリエントという用語の日本語訳として、つまり日本・中国・インド・中近東の政治・文化・歴史・社会を指示する用語

として登場することになった。

しかし、ヨーロッパ人によって創られたオリエントという概念は、イスラム世界から、インド・中国・日本を含み、ヨーロッパ人が自らをオクシデントと呼ぶときの、オクシデントでないものを指す、オクシデントの補完概念として使われてきたものである。

この「負の概念」とでも呼ぶべき東洋を、日本人は「正の概念」として使用せざるを得なくなったのである。なぜなら、負の概念は常に他者に向けられるものであるのに、その他者である日本人は、自らをその一部として含む東洋という地域に住んでいるからである。

この矛盾を克服するために、日本人は東洋から日本だけを除外した使用法を発明したのである。つまり、日本は東洋の一部であるけれども、東洋という「負の概念」から自らを除外することによって、東洋を「負の概念」のまま使用するという手法である。そしてここから東洋という用語の混乱した使用法が始まるのである。

いくつか例をあげたい。1885（明治 18）年に『時事新報』に掲載された社説に「脱亜論」と題する社説がある。そこで使用されている用語はアジア（亜細亜）であり、東洋ではないのだけれども、議論の趣旨は、まだ文明化していないアジアの中で、日本のみが一足先に文明国になるのだという議論である。

1898 年に中等東洋史という教科が学校教育に誕生する。しかしこの東洋史は日本を除外したアジアの歴史であり、国史・西洋史・東洋史という 3 教科体制が 1947 年まで続く。その後高等学校社会科では東洋史と西洋史を統合させて世界史という科目が誕生するが、これは当時教えられていなかった国史を学校カリキュラムに新設するために科目をひとつ削る必要が生じたためである。そして学校教育における世界史と国史という二本立ての科目体制は、国史が日本史と名称を変えた後も現在に至るまで継続している。

ここで疑問を呈する読者がいるかもしれない。岡倉天心は『東洋の理想』の冒頭の書き出しを「アジアはひとつ」という有名な言葉で初めているではないかという反論である。実は、この『東洋の理想』は元々英語で書かれたもので、*The Ideals of the East - with special reference to the art of Japan* と題し、1903 年にロンドンから出版された著書である。その論旨は、ウエストの補完概念としてのイーストに関して、そこにはひとつに纏まる要素があるのだという議論であり、その実例として岡倉天心は、英語の表題からも分かるとおり日本美術をあげたのである。つまり日本美術はアジアの多くの歴史文化を吸収しその上に成り立っているアジアの統合芸術であるという議論を展開したのである。彼の議論が自信にあふれているのは日本美術という強力で現実に存在する事例を基礎においているからである。これはヨーロッパ人の考案したイーストという概念、つまり補完概念或いは負の概念としてのイーストに真っ向から挑戦する著書であったといえる。日本人を読者に想定して日本語で書かれた本ではないからこそ、このような議論が可能であったのである。以下では、これらの例の中から東洋史について少し細かく見てみたいと思う。

XIX

東洋という概念の使用は、歴史研究において顕著である。それは東洋史の発明である。1894 年（明治 27 年）那珂通世は中等学校の外国史を西洋史と東洋史に分けて教授することを提言した。そして、日清戦争後の 1897 年、日本における歴史研究は、東洋史・西洋史・国史という現在まで続く三本立てのシステムをスタートさせた。これに応じて桑原隲蔵は、1898 年に教科書『中等東洋史』を刊行している。しかし、東洋の指し示す対象は、人により、時代により、千差万別である。初期の頃は、『支那史』が『東洋史』と書名だけを変えて現れたものもあった。東洋史は、中国史だけの場合もあればインド史を含めたものもあるし、イスラム世界の歴史までも含めたものも出版されてきた。しかしすべてに共通しているのは、日本が除外されていることである。つまり自らを除外することによって、この曖昧模糊とした東洋という概念を他者に対する概念として使用し続けてきた

のである。西洋化による近代化を急ぐあまり、日本は自国を含む地域を把握するのにすら、「外からの眼」に頼ってしまったのは歴史的事実であるが、ことはそう単純ではなかったといえる。青木富太郎は『東洋学の成立とその発展』（蛍雪書院、1940年）の中で、「注意すべきは東洋史なる語が以上によっても推測できるように日清戦役以後に発生したことでこれは我が日本人の地位の向上並びに日本人の注意の芽が支那のみならずアジア前提に及んできたことを示すものに外ならない。」（148頁）と賛美しているが、日本史を東洋史から除外することによって東洋史が成立していたことは、忘れてはならない事実である。

以上のことからも言えるのは、東洋は実体概念ではなく思考概念であるということである。これは、我々が、ものを考える上で、必要不可決の用語である。例えば西洋という用語を考えてみよう。これはヨーロッパという言葉で置き換えることができると言う人がいるかも知れない。しかしこれはその表現が使用される時と場所による。日本人の使う西洋は、ヨーロッパにかぎらず、ある場合にはアメリカ・ロシアまで含む概念であり、人によっては、カナダ・オーストラリアまで含める場合もある。われわれは、地理的にも実体的にも西洋を定義できない。明治以来150年の間に西洋という用語は、日本人のものを考える上での必要不可欠の思考概念となってしまったといえる。これを私は「インヴェンティッド・ウエスト」（創られた西洋＝実在しないものとしての西洋）と命名し、英文論文の表題にしたことがある。イギリス人やドイツ人フランス人が日本人の使う西洋という概念を知ったら、きっと驚くに違いない。西洋に対応するような実体は現実世界には存在しないからである。つまり西洋とは、「日本人の、日本人による、日本人のためのインヴェンティッド・ウエスト」であると定義できるのではないか。日本人は暗黙のうちにこの西洋の概念を漠然としながらも会得しており、この西洋という用語を使うことで、明治以降の日本は、文明日本のモデルを設定し、自らの文化を作り上げてきた。近代日本の形成に果たした西洋という用語の役割は、計り知れないほど大きいといえる。

これと同様に、「東洋」という言葉で日本人は、今日の日本を作りあげてきたとも言える。この言葉は、ある時には自らのアイデンティティーを作り上げるためにポジティヴに使うか、ある時には西洋に対するコンプレックスを含む意味としてネガティブに使い、またある時には西洋に対する自己主張として使われてきた。しかし「東洋とは何か」ときかれて我々はその定義を未だに持ち合わせていない。東洋は地理学的に定義できない用語である。我々は、ただ暗黙のうちに了解している、或は了解したと思い込んでいるだけである。「思考概念」と名付けるのはそのためである。

以上のような理由で、思考概念として、東洋・西洋はわれわれにとって必要不可欠な用語である。われわれは現在、西洋・東洋に代わる思考概念を持ち合わしていない。ヨーロッパ・アメリカという用語は、西洋にとって代わることは出来ないし、中国・インド・イスラムは、東洋にとって代わることは出来ないのである。

この様な、思考概念として使われる用語は、どこの文化でも持ち合わせているものである。例えば、イーストとかオリエントは、まさに西洋人が作り上げた思考概念であり、これによって、彼らはウエストとオクシデントという自らのアイデンティティーを作り上げてきた。

この思考概念は極めて主観的なものである。西洋人が中国・インド・アラブ世界をひとくくりにして考えることの奇妙さに、また日本と中国と韓国を一緒にして扱うことについて、日本人の多くは疑問を呈する。しかしこれは、裏返していえば、われわれがイギリスとフランスとドイツを西洋と一口で言うのと同じ奇妙さであり、ロシアとアメリカとヨーロッパをひとくくりにして考える奇妙さに通ずるものである。そして問題なのは、その言い方をする当人たちは少しも奇妙だとは思っていないのに、当のいわれる人たちが奇妙だと考えることにあるのである。しかし多くの場合は、母国語で議論したり書いたりしているから、ほとんど相手に通じていないわけであるのだが。

最近では、西洋・東洋という用語法が従来ほど

つかわれなくなってきている。国際情報量の増加が、西洋・東洋とひとくちで済ますことが出来ないような時代にしてしまったことも事実である。しかし英語を母国語とする人々がイーストとウエスト、オリエントとオクシデントを使い続けることは間違いない。西洋と東洋が日本人の思考概念から消えることはない。消える時は日本人が日本人であることを放棄する時である。

注

1）本稿は、1991 年にフランスのブロアで開催された国際記号論学会で、"Invented West and Invented East in Early Modern Japan" と題して発表した英文研究報告に基づく。この研究報告の一部である、東洋と西洋という概念の誕生に関する議論をより詳細に論じたものを、1999 年に京都の国際日本文化研究センターで研究発表した。この研究発表は、拙書『歴史認識の時空』（知泉書館、2004）の第 3 章第 2 節「西洋の補完概念としての東洋」として出版した。本稿は、これらの研究発表に大幅な加筆を行い、「明治初期における英語の導入とそれに伴う日本語表記の変容」という視点から、西洋と東洋という概念用語の誕生の背景にある「思考言語」の問題を論じたものである。

2）和田清「明代以前の支那人に知られたるフィリピン諸島」『東洋学報』12-3, pp.381-408.

3）The 20th International Conference of Historical Sciences (Sydney, Australia), 7 July 2005.

4）Masayuki Sato, “Grounding East Asian Civilization,” [The International Conference on Contemporary World and East Asian Civilizations], (The Asan Institute for Policy Studies, Seoul), 1 June 2011, 8pp.

5）梅棹忠夫、『梅棹忠夫著作集』第 4 巻 275-440 頁。

6）Rudyard Kipling、*The Ballad of East and West* (1889) の冒頭の部分である。冒頭全文は次の通り。“Oh, East is East, and West is West, and never the twain shall meet, Till Earth and Sky stand presently at God’s great Judgment Seat; But there is neither East nor West, Border, nor Breed, nor Birth, When two strong men stand face to face, though they come from the ends of the earth!”

7）Joseph Needham, *The Grand Titration: Science and Society in East and West* (Allen & Unwin London, 1969)

8）Faculty of Oriental Studies があり、その一部として Sub-Faculty of East Asia Studies がある。East Asia Studies は Chinese Studies, Japanese Studies, Korean Studies の 3 部門から成り立っている。

9）School of Oriental and African Studies は、ロンドン大学を構成する機関のひとつであり、1916 年に設立された。

10）Edward W. Said, *Orientalism* (Pantheon Books, 1978).

11）Journal of Oriental Studies は雑誌の冒頭で、その扱う範囲を “articles and reviews in Chinese and Sinophone studies” と限定している。

12）坪井九馬三「明代ノしな人が知リタルしな海いんど洋ノ諸国二就イテ」『東洋學藝雑誌』256 号。高桑駒吉「赤土國考」『史学雑誌』第 31 編。

13）宮崎市定「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」『東洋史研究』7-4（昭和 17 年 8 月）。

14）山本達郎「東西洋といふ称呼の起源について」『東洋学報』21-1、（昭和 8 年 10 月）pp.104-131

15）張燮『東西洋考』(1616) 巻 5 文莱 , 第 1 6 葉。

16）張燮、前掲書、巻 4 西洋列国考、巻 5 東洋列国考。

17）遠藤泰生「『大東洋』から『太平洋』へ」『比較文学研究』69（1993 年）25-39 頁。

18）本書が最初に公刊されたのは 1882（明治 15）年である。